法要　法要は、一周忌だけが満一年で、あとは数え年での年忌となる。数えで三年、満二年で迎える三回忌、以下七回忌、一三回忌、一七回忌、二三回忌、二七回忌、三三回忌と法要が行われる。回忌の年数が多くなればなるほど、重い年忌となり、お斎での料理も品数を増す。

かつては法要の後に、お飾り配りをした。重箱にお飾り餅を五個入れ、隣近所、親戚に配った。これは子供たちの役目で、手間賃となる重箱の中のお返しの小銭を楽しみにしたものだった。三三回忌は大体一世代にあたるといい、ここまでが、三、七ごとの年忌で、五〇回忌はいわゆる忌上げである。五〇回忌まで無事勤め上げることが出来た、という思いは、目出度い法要となり、肴の歌と共に大盃が回ることもある。一方、その間に、親戚も次々と増えており、五〇回忌をもって親戚づきあいの区切りとするという、それとなしの了解もある。最後の法要を勤め上げる喜びの中に、そこはかとない感慨も漂うのである。

㈣　墓制

先祖が生きた証は、古墳、塚、板碑、五輪塔、墓印の石、墓石に残っている。それらの在る場所からは、先祖が共同体の何を守ろうとし、何を願いとして働いていたのかが伝わってくる。墳墓ということになると、古墳から問題にしなければならないのだが、民俗は、一般の人々の生活を紐解くもので、塚あたりからを取り上げる。塚は墳墓であることもあるし、何かの―特に経典を収めた―祈念碑であることもある。人工に造られた小さな山である塚は、後の世にも地域の人々に特別な思いを持って記憶されていく。そこには、しばしば五輪や宝篋印塔が建てられている。全てが墳墓ではないにしろ、墓制との関わりが深く、ここで取り上げる。また、五輪、宝篋印塔は中世の墓石であったり、供養塔であることが多い。五輪や卵塔の後、墓印の人工石は姿を消し、大体元禄頃（一六八八～一七〇四）から現在の墓石の原型が姿を現すようになる。この頃は、寺檀制度が確立し、家が共同体の基礎単位になった頃である。そこで家族意識の表れである、〇〇家の墓が生まれた。すなわち、墓石、墓石文化は、仮に五輪、宝篋印塔が近世初頭まで残存として残ったとしても、そこには七、八〇年の断絶があるのである。そういう中で、広岡満覚寺境内の歴代墓にはその間隙を埋める年号が記されており、珍しい。

天正・寛永・万治（15世紀末～17世紀半ば）などの年号が見える広岡満覚寺歴代墓

子孫を残して去っていく時、古墳の主でなくても、切り開いてきた土地が子孫